



ラテンアメリカ文学選集

くもり空



Octavio Paz

Tiempo nublado

現代企画室



江苏工业学院图书馆

Octavio Paz

Tiempo y Eternidad

藏书章

〔訳者紹介〕

井上義一（いのうえよしかず）

1949年福井市に生まれる。

現在、慶應義塾大学専任講師。スペイン文学専攻。

訳書に、ガルシア＝マルケス『青い犬の目』（福武書店）などがある。

飯島みどり（いいじまみどり）

1960年東京に生まれる。

現在、東京大学大学院在学中。ラテンアメリカ近現代史専攻。



ラテンアメリカ文学選集③ 編集・鼓直 木村榮一
くもり空

発行——一九九一年九月三〇日 初版第一刷 二〇〇〇部

定価——二二六六円（本体二二〇〇円）

著者——オクタビオ・パス

訳者——井上義一／飯島みどり

装丁——栗津 潔

発行者——北川フラム

発行所——現代企画室

住所——101東京都千代田区猿樂町二二一五 興新ビル 302

電話＝03・3293・9539・FAX＝03・3293・2735

振替——東京二一一六〇一七

印刷——ミツワ印刷

製本——松栄堂製本

0327-910930—1980

©Gendaikikakushitsu Publishers, 1991

Printed in Japan

くもり空

Originally published under the title of

Tiempo Nublado

© Octavio Paz, 1983

© Editorial Seix Barral, S. A., Barcelona, 1983

© Harcourt Brace Jovanovich Inc., New York, 1985

Japanese translation rights arranged with
Harcourt Brace Jovanovich Inc., New York
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

Japanese edition © Gendaikikakushitsu Publishers, Tokyo

目 次

序	7
---	---

第一部 くもり空

〈第一章〉旧世界を瞥見する

批判からテロリズムへ	1 3
------------	-----

ジャコバン党の遺物と民主主義	2 2
----------------	-----

〈第二章〉帝国主義的デモクラシー

デカダンスの発見	3 5
----------	-----

エピクロスかカルヴァンか	4 9
--------------	-----

〈第三章〉全体主義の帝国

ポリュペモスとそのしもべたち	7 4
----------------	-----

同盟国・衛星国と対立国	8 6
-------------	-----

〈第四章〉動乱と復活

周縁部での争い	1 0 4
---------	-------

排他主義の出現	1 1 3
---------	-------

〈第五章〉変化

移植と再生	1 2 6
-------	-------

ラテンアメリカの将来	1 4 3
------------	-------

インクの染み	1 5 6
--------	-------

第二部 流れゆく日々

〈第一章〉メキシコとアメリカ合衆国——位置と対置

貧困と文明……………167

北と南……………170

内と外……………176

過去と未来……………180

二重の矛盾……………185

〈第二章〉ラテンアメリカと民主主義

反近代の伝統……………191

独立、近代、民主主義……………198

歴史的正確性と全体主義的な無神論……………203

帝国とイデオロギー……………211

民主主義の擁護……………216

〈第三章〉自由についての年代記

風の種を播く……………224

嵐の収穫……………227

非現実的社会主义……………231

終わりが始まりか？……………236

解説……………249

序

一九八〇年のはじめ、私はスペインやブラジル、イスパノアメリカのいくつかの新聞に、まだ遠くない過去に関する一連の文章を発表したが、それらを本書『くもり空』にまとめるにあたっては、ためらいがなかったわけではない。ある文章は当時の状況にあまりに密着しすぎていたし、また、ある事件は今日ほとんど重要性を見いだせなくなっている。そういうわけで、かなりのページを割愛した。同時にまた、修正や変更をほどこした文章もあり、加筆しなければならなかった箇所も数多くあった。このように改めて筆を入れてはみたが、この種の作業には不完全さと限界が隠しようもなく目につく。要するに、私は歴史家ではないのだ。私が情熱を注ぐ分野は詩であり、おもな関心事は文学である。ところが、激しく揺れ動くこの現代に向かって、権威ある発言をしようとすると、詩も文学も確固たる支えとはなってくれない。もちろん、私は世の中に起っている事柄に関心があるからこそ——無関心でいられる人間などいるだろうか——時事的問題についてさまざまな論評やエッセーを書いてきた。だが、その視点は常に中心から離れた所、いわば周縁部からのものであった。私は、いかなる場合にも、マルキシズムのように百科全書的な広汎さを自負するイデオロギーに基づいて、確信ありげな発言をしたことは決してなかったし、キリスト教やイスラム教のような不変の宗教的真理をとнаえる立場に身を置いたこともない。また、ニューヨーク、モスクワ、あるいは北京といった歴史の中心地——実際そうなのか、単にそう仮想しているだけなのか、その

点は知らないが——に赴いて記事を書いたわけでもない。したがって、これら一連の文章に価値ある見解や納得してもらえただけの仮説が含まれているかどうかは、私には分からない。ただ分かっているのは、現代の世界を前にして、いかなるものにも与しないひとりのラテンアメリカの作家が抱いた感想や反応が書き記されているということだけである。所説とは言えないまでも、証言としては読んでいただけるだろうと思う。

古代マヤ人は時を計るのに、『短期計算法』と『長期計算法』と呼ばれるふたつの方法を持っていた。フランスの歴史学者たちはこの方法に倣って、歴史の進行過程の幅を『短期継続』と『長期継続』に分けて考える方法を採用した。『長期継続』は大きなリズムで、はじめのうちは感じられないほどのペースで進行していくが、やがてそれは社会の古い構造を根底から覆し、別の構造を造り上げる。『長期継続』は、緩慢ではあるが決して元に戻ることはない社会変化をもたらす。たとえば、現在でも説明が不十分なまま残っている人口の増減の問題はこの領域に属する。そのほかにも、科学技術の進歩、新しい天然資源の発見とその涸渇、社会制度の風化、社会全般のものの考え方や感じ方の変化などもこれに属する。一方、『短期継続』はもっぱら歴史の各局面での支配権の問題に関わる。たとえば、帝国の崩壊、新国家の誕生、革命、戦争、大統領の退位、独裁者の暗殺、えせ聖人による予言者の磔刑などがそれにあたる。歴史はしばしば織物に喩えられる。それは多くの人手によってなされる作業であるが、各人は別々の仕事をしていて、どういう品物ができあがるのかわからないままに、さまざまな色の糸を組み合わせ、やがて布地の上に一連の模様が浮かび上がってくる。その模様は馴染みのものであると同時に謎めいてもいる。『短期継続』の視点から眺め

ていると、反復する模様は見えてこない。歴史は絶え間ない創造であり、更新であり、唯一無二の事物の王国であると見えるのである。ところが《長期継続》の視点に立つと、あるリズム、つまり終結と再開の繰り返しが見えてくる。どちらの映像も真実である。

私たちが経験してきた歴史の移り変わりの大半は明らかに《短期継続》の領域に属している。しかしそのうちで最も重要な事件は、直接あるいは間接に《長期継続》の領域とつながりを持つ。最近の十年間の現象を眺めると、歴史のリズム、つまり、二世紀以上に渡って徐々に進んできた変化がはっきりと見て取れる。そして、そのほとんどは私たちを暗澹とさせるものだ。発展途上国における人口の膨張、エネルギー資源の涸渇、大気や海洋や河川の汚染、インフレーションとデフレーションの間を揺れ動く世界経済の慢性的疾患、それぞれが普遍性を目指し、正統性を主張しながら分裂していくイデオロギー。結局、私たちの社会は、国家がもたらす恐怖と、それに対抗する狂信的グループが与える恐怖のはざまにあって、病んでいるのである。《長期継続》という概念は、私たちが歴史を一望の下に見渡せる立場にいるという考えを抱かせる。つまり、自然の不变を見るような歴史を私たちが目の前にしているという気にさせる。だがそれは間違った印象である。自然もまた動き、変化している。《短期継続》の領域で起こる変化は、光と闇、真昼と黄昏、雨と嵐、雲を払う風と竜巻を起こす風などのように、時によって違った相貌を見せながら、あるひとつの場所に起こる現象として、一見不変のように見える背景の中に書き込まれるべきものなのである。

私はこのエッセー集を二部に分けた。第一部は五つの章から成り、それぞれ、旧世界の国々の主張と将来への展望の変化、アメリカ合衆国の帝国主義的デモクラシーの危機、その対立国ソヴィエ

トの官僚支配のシステム、それに対抗する自主独立主義、とりわけ周縁部の国々が唱える主張、そしてさまざまな危険性と困難を抱えた近代化について論じた。第一部の中のラテンアメリカの現状について言及した部分は、第二部で同じテーマでさらに論じたので、第一部五章を除いてはできるだけ削除するようにした。

第一部

くもり空

〈第一章〉 旧世界を瞥見する

批判からテロリズムへ

一九六〇年頃、欧米社会を揺り動かす大衆的規模の異変が起こった。マルキシズムの予言に反して、社会的危機は経済問題に由来するものではなく、政治的問題、より厳密に言えば、倫理的・精神的問題に起因していた。また、運動の主役を担ったのはプロレタリアートではなく、特権的なグループ、つまり、学生たちであった。アメリカ合衆国では青年層が反乱を起こし、政府のインドシナ政策に対する不信感を大きく煽った。西ヨーロッパでは、政府の権力機構や社会制度が打ち崩されるまでには至らなかったが、政府の権威と威信は失墜した。青年たちは運動の過程で、革命家のような言葉遣いによって批判を押し進めたけれども、言葉本来の意味に即して言うなら、それは革命^{レボリューション}でも動乱^{レンデルタ}でもなかった。他の本で私が定義した意味に従えば、反逆^{レベリオン}と呼ぶのが最もふさわしい運動だった。⁽¹⁾ 中産階級の一部の者たちによる『文化の革命』だったが、この点では中国の文化革命が実態において文化の革命ではなかったのと対照的である。六〇年代の青年層の倫理的問題に関する反逆は、結果として、欧米社会の風俗習慣に並外れた自由、特に性風俗の自由をもたらすことになった。この運動は、もうひとつの影響を残していった。それは、上は政府から下は父親まで含めて、あらゆる権威といったものが失墜したことである。彼ら以前の世代は父親を畏怖すべきものの、尊敬すべき存在として拝してきた。スターリン、ヒトラー、チャーチル、ドゴールはその象徴

であった。ところが六〇年代になると、気まぐれにはしゃいだりふくれたりする神の子が、むつつりと沈黙した父なる神の座を奪ってしまった。世は孤高を保つ老人を讃える時代から、若者族が騒ぎ回る時代へと移り変わったのである。

このように大学紛争は欧米社会を揺さぶったが、ソヴェエトや各国の共産党で、この運動を利用したり、誘導しようとしたところはひとつもなかった。それどころか逆に、右翼の手に操られた運動であると決めつけ、ブチブルの、無政府主義的、退廃的という言葉で告発した。ソヴェエトという階級制度社会の国がこの運動を敵視したのはうなずける。青年層の反逆は、資本主義消費社会に対する怒りの爆発でもあるが、また同時に、国家や権威といったものの全てに鋭い批判を投げかけ、絶対の自由を求めた運動だったからである。

続く七〇年代には、ソヴェエトをはじめとする『社会主義』の国々に反体制派の人々が現れ、彼らの存在を欧米が初めて認識するようになった。ここで特に言っておきたいのは、彼らの存在を認めることによって、現代の知識人が良心を持ち続けていることを示すことができたという事実であり、この事の重要性は、倫理面や政治面で、ヨーロッパのみならずラテンアメリカでも、今後ますます強く意識されるだろうということである。それ以前にも、特殊なグループ——アナキスト、シュールレアリスト、かつてのマルクシストや活動から脱退した共産党の闘士など——が官僚主義的社會主義の実態を暴こうとしたことはあったが、ロシア帝国内から反体制派の人々の声が、ヨーロッパの知識人の耳に届いたのはこれが初めてであった。それによって明らかになったのは、この体制が搾取と抑圧をより全面的に、より過酷に押し進めるシステムにはかならないということ